特集「言語力」大賞コンテスト

平成１７年度から始まった弘前大学学生『言語力』大賞コンテストは、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうという意図の元に附属図書館主催で行われているものです。

第１回（平成１７年度）、第２回（平成１８年度）、第３回（平成１９年度）の受賞者は下記の通りです。受賞作品及び講評を、弘前大学附属図書館ホームページに載せていますので、興味のある方は是非ご覧ください。

［ 第３回受賞作品ＵＲＬ ］

http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop//gengoryoku/gengoryoku3_sakuhin.html

（上記 URL から、第１回・第２回にもリンクしています）

第１回（平成１７年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト　受賞者一覧

部門	賞	学　部	学年(注)	氏　名	タイトル
Ⅰ　文学作品部門	大　賞	人　文	３年	斉藤　大輔	ゴドフリー・デリックの憂鬱
	優秀賞	農　生	１年	龍田　和幸	思い出せ
	〃	医	１年	福地　香	雪御伽
	佳　作	人　文	１年	市毛　春奈	水中楽園
	〃	人　文	３年	若林　由来	旅の石
	〃	教　育	３年	渡部　知也	カレン
	〃	理　工	３年	平塚　晋也	西日と葡萄
Ⅱ　評論部門	応募作品なし				

※（注）学年は、受賞時における学年です。

応募総数１２点（Ⅰ文学作品部門１２点、Ⅱ評論部門０点）

第２回（平成１８年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト　受賞者一覧

部門	賞	学　部	学年(注)	氏　名	タイトル
Ⅰ　文学作品部門	大賞	人　文	１年	早坂　美春	葬式パレード
	優秀賞	人　文	４年	澤岡　結	ぼくの、愛すべき家族へ。
	佳作	人　文	１年	三浦　南	夏の地蔵
	〃	人　文	４年	若林　由来	なつ、みどり。
	〃	教　育	４年	渡部　知也	夏のつがい
	〃	農学生命	３年	洞口　拓	違った視点
Ⅱ　評論部門	応募作品なし				

※（注）学年は、受賞時における学年です。

応募総数１４点（Ⅰ文学作品部門１４点、Ⅱ評論部門０点）

第３回（平成１９年度）弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト　受賞者一覧

部門	賞	学　部	学年	氏　名	タイトル
Ⅰ　文学作品部門	大賞	該当作品なし			
	優秀賞	人　文	２年	三浦　南	もじおと
	佳作	人　文	３年	公平　克彦	クライモン
	〃	人　文	３年	和田　大	闇色の願い
	〃	理　工	２年	千頭　昇	みんなのかがく
	〃	理　工	２年	林　正隆	子供的社会
	〃	理　工	３年	岡田　俊彦	アンラッキー・ピープル
	〃	農学生命	４年	飯田　浩	薄暗い中で
Ⅱ　評論部門	大賞	該当作品なし			
	優秀賞	該当作品なし			
	佳作	理　工	２年	齋藤　学	主体性を育てる教育とは
	〃	医	４年	大内　衆衛	情報・通信技術の進展と主体の消失

応募総数３１点（Ⅰ文学作品部門２６点、Ⅱ評論部門５点）

第2回『言語力』大賞コンテスト

言語力大賞コンテストについて、思ったこと、感じたこと

第２回大賞受賞　人文学部２年　早坂美春

私がこのコンテストを知ったのは総合教育棟の掲示板でした。ポスターを見たのはちょうど夏休みの前あたりで、時期的にはちょうどいいと思ったのです。そのとき私は大学の文芸部に所属していて、部活の先輩から「どこか賞に送ってみたら？」と言われていました。でも私は文学賞にどんなものがあるかなんてまったく知らなかったので、公募ガイドを買ってみたり、パソコンで検索してみたりして探していましたが、なかなか良い条件のものが見つかりません。やはり私には無理だと思っていたら、偶然言語力大賞コンテストの募集を見つけたのです。まず募集されている作品の規定の文字数が魅力的でした。四千字ということは原稿用紙十枚。そのときそれほど長い小説を書いたことがなく、また長いものを書き上げる自信もなかった私は、その短さに惹かれました。それに主催が弘前大学附属図書館ということでやはり安心感がありましたし、しかも副賞の図書カードの金額が高額で驚きました。普段は文庫本しか買えないけど、もし図書カードがもらえたらハードカバーも買えるよなぁ、すごいなぁ、とそんな風に思い、応募することに決めました。

よし、やろう、と決心したのはいいものの、ほかの人たちがどういう作品を送っているのかが非常に気になりました。文芸作品という大きなくくりだったので、もしかしてほかの人は詩や俳句を送っているかもしれない、私だけが小説かもしれない、と不安になったのです。もちろん文芸作品ということなので、小説でも詩でも短歌でも受け付けてはくれるのでしょうが、それでもひとりだけ違うジャンルというのはなんとなく嫌でした。やはり違う形式のものを比べて優劣をつけるというはすごく難しいことだと思うのです。どうしてもたくさん送られたジャンルに目がいきますし、小説よりも詩が好きだというような審査員の嗜好が入るかもしれません。きちんとした審査員の方々なので私の杞憂だとわかってはいるのですが……。それから募集要項のページに審査員が言語力大賞コンテスト実行委員会委員とあったのですが、その委員の方が大学の先生なのか図書館の職員の方なのかそれとも学生なのかと一瞬考えてしまいました。審査員の方がわかったからどうするわけでもないですが、きちんと書いてあるほうが信頼できるような気がします。それからもうひとつ、私がこうしたほうが良いと思う点があり

ます。もっと宣伝すること、です。私が賞をいただいた後に、「そんな賞があるなんて知らなかった。応募したかった」という人が何人かいましたし、友達のほとんどは「言語力大賞コンテスト？　なに、それ？」という感じでした。掲示板には掲示されていたし、ホームページにも載っているのですが、応募作品の数を増やすにはもう少しいろいろな場面で宣伝をするのがいいような気がします。たとえば学食にも目立つようなポスターを貼る（学食は生徒がたくさん集まるから自然と目に付く）とか、生協の本売り場にもポスターを貼らせてもらう（本が好きな人なら応募してみようと思うかもしれない）とか。

なんだか偉そうなことを書いてしまいましたが、特に手続きでは不便だと感じたことはありませんでした。上の意見は、こうしたほうがもっと良くなるのでは、という点です。言語力大賞コンテストは次で三回目というまだ新しい賞ですが、少しでもこの意見が賞をより大きく知名度のあるものにするお手伝いになれば幸いです。

（はやさか　みはる）

『言語力』大賞コンテスト審査員を経験して

第２回言語力大賞実行委員　人文学部　奥野　浩子

軽い気持ちで引き受けた第２回『言語力』大賞コンテストの審査員でしたが、応募作品を前にして後悔しきりでした。学生の創作力や表現力が想像以上だったのです。学生のレポートや試験の答案を読んでいて『これで大学生の文章なの？』と、出るのはため息ばかりという経験が多かったからです。

応募作品を読んでいて「審査する」ということが「優劣をつける」ことであるということに改めて当惑し、できるものなら審査員を辞退したいと思いました。それでも引き受けた以上は、自分なりの観点で序列づけをすることにし、まず、「物語の展開が自然かどうか」を私なりの基準で二種類に分け、次にそれぞれの中で「表現力」により序列づけをするという方法をとりました。とにかく苦痛を伴う過程でした。時に自分の大学時代が思い出されたり、文章から色彩が浮かんできたりして、審査を忘れて感心させられる作品もありました。苦痛を伴う審査員経験でしたが、無からの創作に挑む学生が存在することを知ってホッとしたのも事実です。

今後もこのコンテストを続けていくために、いくつか提案をしたいと思います。まず、審査員の資格を明示していただくこと。実は、私は最後まで『私が審査員でいいのか？』という疑

問がぬぐいきれませんでした。外部の著述家を審査員に招くところまでは必要がないかもしれませんが、作品を募集するにあたり、応募作品を審査する審査員の資格も明示する必要があるように思います。さらに、審査員は全員が交代するのではなく、何人かは次の年も審査に加わるようにして、この賞の質を一定に保つようにしてもらいたいと思います。また、審査期間は十分にとっていただきたいと思います。今回は、後期開講直後の忙しい時期の審査でした。もっと時間的余裕が欲しいと思ったのは私だけでしょうか。これには、１０月２７日の文字・活字文化の日に結果を発表するという制約があったためと思われますが、結果発表日を固定するのであれば、そこから逆算して締切日を設定していただきたいと思います。応募作品数が増えた場合、一ヶ月足らずでの審査は不可能だろうと思います。私はこのような創作の経験はありませんが、応募する学生が十分な時間をとれるように募集期間を設定して、応募作品が増えることを望んでいます。授賞作品を発表した後で、読後感想文を募集するというのはどうでしょう？もっと広がりをもたせるコンテストであってほしいと思っています。

（おくの　こうこ）

想像力と好奇心

第２回言語力大賞実行委員　教育学部　吉田　比呂子

２００５年から始まった言語力大賞の選考委員の一人として、レポート以外の学生諸君の文章を読む機会を得た。言語力大賞の選考という機会を通して、学生諸君の想像力と好奇心に関して私の感じたことを、この場を借りて書かせていただくことに致しました。言語力大賞の選考の中で感じたこと、そして日頃接する学生諸君の感性とその表現力について私の感じたことを少し整理して書かせていただきました。従って思い付きや勝手な解釈もあるかとは思いますがご容赦ください。

さて、１回目、２回目の言語力大賞に応募されてきた作品を読ませていただいた私の感想は、作品の多くは「日常性」の中の「非日常性」やその逆の「非日常性」の中の「日常性」ということをテーマとしているものが多いように感じた。それは私の講義のレポートとして提出されてくる学生諸君のレポートの内容やテーマとも共通する点でもある。レポートは学生諸君の個々の興味や関心に基づいたテーマと内容を絞り込んで貰う形なので、それぞれの年ごとの学生諸君の興味や関心の傾向をレポートから自然と読み取ることになる。つまり、言い換えれば毎年、毎年の

学生諸君の想像力や興味の傾向をレポートから見ることになるのである。近年の学生諸君のレポートの問題の絞り込み方や関心の傾向は、私的な物事や言葉から出発するものが非常に多くなっている。例えば、「おにぎり」や「おむすび」等、日常使用している俗語の語源を調べたり、その違いに興味を持つ人が多くなっているのである。このように学生諸君の自己の興味や関心がより日常の言葉や生活に根ざしたものになっているのである。確かに以前にも日常に根ざした文化や事柄に関心を持っていた人は居ましたが、近年の傾向はより私的な小さな世界の中で破綻することのない状態を求めている。つまり小さい完成された世界にすることを求めている傾向が強く見られるのです。このようにするためには、自然と自己の私的な世界に閉じこもることになり、自説の破綻を避けるために自己の想像力や好奇心を疑うことなく、ただ守り固執するというレポートが増えている。

勿論レポートと小説の想像力の質は違うが、自己の世界を創り上げるという点では共通する。そして読者や読み手に共感や共有性を求めるという点では、他者に発信するものであるから同一の性質を有するものだと言える。人は自己の世界を創り上げた時、その世界にプライドを持ちたいために、他者に共有、共感して貰いたいために知らず知らずに傲慢になってしまうことがある。独りよがりにならないために私は、論文や本を纏めたときいつも自己の世界を問い直すことにしている。小説を書くときもレポートや論文を書くときも、一度、立ち止まりこの私の創り上げた世界は独りよがりではないか、共感されるものか、阿ってはいないか、を問い直して貰いたいと思います。自己の世界が他者に共感されること、理解されることは自己の可能性を拡げることなのです。言語力大賞はその切っ掛けになれれば、それで十分意味があるものだと私は思っております。

（よしだ　ひろこ）

第２回表彰式の様子

第3回『言語力』大賞コンテスト

誰かに知ってもらいたくて、書いた物語

第３回優秀賞受賞　人文学部２年　三浦　南

去年に引き続き、応募をしようと決めていましたが、誰かに読んでもらいたい話がなかなかできあがらなかった夏休み。その時、ふと思いついたのが『共感覚』でした。今回賞をいただいた「もじおと」は文字を見ると音が聞こえる共感覚を持つ少年が主人公です。

作中では共感覚という言葉は一度も出てきませんから、共感覚の存在を知らない人が読めば、ファンタジー小説であるだけ。ただ、評価されたからこそ伝えたいことができました。

共感覚を描くことは、私の中で特別なことでした。書くからには絶対にいいものにしたいし、でたらめなことは書きたくないと、締め切りの日までずっと考えていました。推敲をしながらも、本当に書いていいのかと迷いました。どうすればおもしろく読んでもらえるか、どの場面を入れるか、共感覚をどの程度盛り込めばファンタジーで通るか。

私は「もじおと」についてずっと悩んでいましたが、本来小説を書くというのはこういうことなのかもしれないと感じました。書き手は、読み手のために少しだけ苦しい思いをする。それは、小説は読者がいて初めてできあがるものだから。誰かが読んで、感じて、考えて、そしていろいろな形が生まれていく。小説はそうであったら素敵だと思います。

「もじおと」も、よく分からないファンタジーだと思う人、授業で隣に座った人がこんな感覚を持っているかもと考える人、自分も共感覚者だと気付く人、そこそこおもしろい話だと思ってくれる人、いろんな人がいて欲しいです。

物語を仕立てていくうちに、私は私の好きなもの、素敵だと思うこと、嬉しいことを誰かも素敵と思ってくれたらいいなと考えるようになりました。素敵を伝えるために、おもしろく書いてやろうと。

物語を書くためには、何か自分なりの思いがあった方がいいと思うのです。なぜ書くのかは、なぜ生きるのかに似ています。答えがたくさんあっていいもので、自分の理由を見つけなければ、決められなければ、続けられないこと。逆にいえば、何か書きたいことがあれば、伝えた

いことがあれば誰でも書けるものではないでしょうか。

言語力大賞コンテストの規定字数は少ない方なので、興味のある方は挑戦して欲しいです。いろいろな作品があれば、素敵な話が生まれるかもしれません。私は書き手である前に読み手であるので、もっともっと物語と出会いたいです。審査員として参加したいくらい。

字数については、毎年授賞式で少ないという意見が出ます。個人的には、短編である方が初めて小説を書いてみようと思う人も応募しやすいだろうし、審査員も目を通しやすいのではないかと思います。年々応募数が増えているならなおさらです。何より、短編小説というのは限りなく必要な言葉だけでできているもの。どんなテーマで、いかに書き上げるか、決まった字数内でまとめられるかは、書き手の腕の見せ所です。

書きたいと思った時が、勝負ですよ。

（みうら　みなみ）

言語力大賞と詩歌

第３回言語力大賞実行委員　人文学部　内海　淳

言語力大賞の選考委員を第２回・第３回と続けて担当した立場から、これまでの応募作品について少し述べてみたい。ただし、何らかの賞を受賞した作品についてはすでに選考委員からのコメント等があるので、ここでは、受賞しなかった作品、特に詩歌の応募作品について述べようと思う。

大賞の選考は、７名の選考委員が全作品を読み、それぞれの委員が順位をつけた結果を持ちより、各委員の順位の数値を加算した結果最も少ない数値の作品を最も優れたものとするという方式で行われた。しかし、２０や３０もある応募作品に明確な順位をつける事は事実上不可能である。私の場合は、まず、「良い」、「普通」、「悪い」の３グループに分けたが、細かい順位は上位の「良い」グループの５から６作品程度しかつけられず、残りの「普通」グループは実質的な順位は付けていない。しかし、「悪い」グループは明確に最下位となる。

この「悪い」グループは、第２回の時には２作品、第３回の時には１作品だったが、どちらにも同一の応募者の俳句の作品が入っていた。しかし、これは俳句だから駄目だという訳でも、

この人物の作品が殊更に劣っていた訳でもない。評価できなかったのである。この応募者は、第２回の時には１句、第３回の時には１０句程度の俳句で応募している。しかし、この程度の分量では詩歌を評価する事はできない。

国語の教科書等では、俳句や短歌のような詩歌を、一人の作者について１句や１首のみ挙げて紹介することが多い。例えば、芭蕉であれば「夏草や強者どもが夢の後」であるとか、藤原定家であれば「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」などが挙げられるであろう。このようなことから、この応募者は俳句や短歌などは１句や１首でもその価値が認められるという考えを抱いて、第２回の時に１句のみで応募したのであろう。

しかし、これらの名句や名歌はすでに評価が定着しているから１句や１首で挙げられているのであり、最初から単独でその価値が評価された訳ではない。芭蕉の「夏草や強者どもが夢の後」は、『奥の細道』という文脈の中で評価され、その名句としての地位が高まっていったのである。芭蕉や定家のような卓越した才能をもつ者であれば、たった１句や１首でもその才能を評価できるのかもしれないが、私のような単なる読み手に過ぎない者にとっては不可能である。

この応募者は第３回の時には１０句以上で応募したが、私は再び「悪い」グループに入れた。各句の間に有機的な関連が見られず、単なる寄せ集めであると判断したからである。複数の俳句や短歌を無作為に並べるのではなく、その内容やイメージを考えながら物語性や明確なメッセージを植え付けるように配置することが必要となる。例えば、寺山修司の「ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし」という有名な歌は、「草の穂を噛みつつ帰る田舎出の少年の知恵は容れられざりし」など他の歌と相互に作用して、田舎の文学少年の劣等感を強烈に打ち出す明確な物語を紡ぎだしている。

言語力大賞は決して詩歌を認めていないのではない。ただ、詩歌で応募する者は、俳句や短歌で何らかの「物語」を作り上げてほしい。そのような詩歌の作品であれば、ちゃんとした評価の対象となるであろう。

（うつみ　じゅん）

第３回表彰式の様子

弘前大学生の「言語力」について

第３回言語力大賞実行委員　教育学部　郡　千寿子

弘前大学附属図書館主催の言語力コンテストも今回で３年目となる。初回から審査委員のひとりとして参加しているが、学生の文章表現能力について感じたことを少し述べてみたいと思う。

近年、生徒や学生の言語力の低下が様々なところで取り上げられることが多い。

２００３年、経済協力開発機構（通称ＯＥＣＤ）が世界３２カ国で１５歳児（約２６万５千人）を対象に学習到達度調査（通称ＰＩＳＡ調査）を実施した。読解力、数学、科学の主要３分野についての学力調査であるが、２０００年からの経過比較ができるため、２００３年の調査結果が大変注目された。ご承知のように日本は、「読解力」が８位から１４位に低下し、いわゆるＰＩＳＡショックが教育界を揺るがすことになった。教育内容についても、文学偏重から言語力重視へと見直されることになり、教育の現場は大きな改革途上にあるといえる。

そうしたことを背景に考えると、大学での「言語力コンテスト」の存在もまさしく教育実施政策としても位置づけることができる。学生たちに「言語力」について再考してもらい、またそうした技術を磨く機会としてもらおうという狙いもある。応募者数が増加している点、また応募者の力量が上がっている実態からみて、その効果のほどは少しずつではあるが現れてきていると思われる。

さて、肝心の学生の言語力の現状についてである。評論部門に応募が少ないことは、論理的な文章構成能力に自信がない学生が多いことを示しているともいえよう。批評や論理的な思考を回避しがちな学生のひとつの実情でもあるが、今後はこの方面にも、果敢に挑戦してほしいものである。

一方の創作については意欲作が多く、応募数も増加している。しかも人文系の学生だけでなく、農学生命、理工、医学部といった理系学生たちの参加が多いことには正直、びっくりさせられた。つまり、小説といった創作活動については、文理問わず、能力や意欲を秘めた学生が多いということである。書くことが苦手、と評価されがちな今時の学生たちであるが、実は機会さえ与えてやれば、そして教育方法によっては、文学的な資質や能力が一段と伸びる可能性があることを示していると思われる。世間ではクールと思われがちな彼らだが、自己内面に表現したい、という熱い欲求をもっている学生たちが多いことは喜びである。どの作品からも、若い彼らならではの発想と文学的薫りが見て取れた。

ただし、世界レベルで必要とされている言語力というのは、前述したＰＩＳＡ型読解力であり、批判力をも含む論理的な文章表現力である。ある意味で他者とは隔絶した、独特の世界観をもつ想像性豊かな創作の分野においては、本学にも能力高い学生が多いようだが、その一方で、創造の世界だけに限らない、論理的な言語表現力の方にもぜひ目を向けて研鑽を積んでもらいたいと思う。

創作も評論も、どちらの言語力においても磨きをかけ、今後ますます活躍してくれる学生が増えることを期待するばかりである。

（こおり　ちずこ）

書くことと「書く力」

第３回言語力大賞実行委員　農学生命科学部　佐原　雄二

学生にとって、論理的で改まった文章を書く場合といえば、試験の答案やレポート、それに卒業論文や修士論文などであろう。とりわけ卒業論文は、たいていの学生が取り組むものであるうえ、自分だけの課題を長文で書き表すという意味で、学生生活の締めくくりとして重要な機会である。何年も卒業論文の添削を行ってきた経験から、私は次のように考えている。

自分の考えを平明に、誤読されないように書くこと、それが最重要のことである。ところが実際には、（個人差の大きいことを断っておくが）内容が理解できなかったり誤読されやすかったりするタイプの文章にしばしば遭遇する。症状としては論旨の飛躍、不必要に長いセンテンスや段落、適切でない言葉の使用や言葉の不足など。書いた当人はどうやら内容が分かっているらしいが、読む人には伝わらない。これでは本人が損をしてしまう。

こういった文章がなぜ生じるのか。そもそも、そのような文章を書く機会がないことがあげられよう。さらに思い当たるのは携帯メールの罪過である。あれも確かに「書く」行為には違いない。しかしメールで使うのは通常話し言葉である。話すことは書くことと違ってさほど論理的でもないし、そもそも難しい論題を扱うことも、その論題で相手を説得することもないだろう。携帯メールは、「携帯を介在して話をしている」のであって、文を書いているのではない。しじゅうメールをうっていることは、「改まった文章を書く」場合にも同じ調子で臨むことにつながるのではないか。

「書く力」を涵養するにはどうするか。第一には良書を読むことである。何も自然科学の「硬

い」文章を読めというのではない。もちろん文学の分野にもいい文章はたくさんある。志賀直哉の簡潔で平明な文体などは大いに参考になる。第二には、批評を恐れずに書くことであろう。原稿用紙のひとマスずつに書き込んだ時代とは違い、今は文の推敲が簡単に行える。自分で書いた文章を、何度も推敲を重ねて磨き上げていくことの楽しさをぜひ体験してもらいたい。

「言語力大賞コンテスト」はそのような機会の一つである。これで３回を重ねた「コンテスト」について若干の感想を述べたい。まず、「評論」部門の応募が３回目に至ってやっと現われた。このように少ないのはどういうわけか。かっちりした論理的な文章を書くことが苦手なのだろうか。あるいは論理を展開すること自体が苦手なのだろうか。腕試しのつもりでぜひ挑戦してほしい。

他方、創作部門は定着しつつあるようだ。中には２年続けて応募する人もあり、好ましいことと思う。一般に実体験が乏しい一方、学生の書いた小説には清新さがあって、読んでいて楽しい作品が結構ある。もっと宣伝の余地がある以外は、「コンテスト」の現行方式に大きな問題はないと感じるので、このまま回数を重ね応募作品が増えてくれば、さらに質の高い作品が現われるのではないかと期待する。

最後に一言。文学作品なのだからといって、感性だけで文章を書き連ねていっていいものではない。破格の文体や異様な状況設定などの奇策に頼るのでなく、まずは正攻法に習熟するのが正道であろう。書き表したいことを的確な言葉を用いて読者に分かりやすい文章にすること、これは文系・理系を問わず肝心なことである。　　（さわら　ゆうじ）

第３回弘前大学学生『言語力』大賞コンテストは下記のスケジュールで行われました。
対　　象：学部学生
部　　門：Ⅰ文学作品部門（ジャンルは自由）　Ⅱ評論部門（テーマの設定は自由）
字　　数：両部門ともに、原則として 4,000 字程度
広　　報：平成１９年６月中旬～
　　図書館ＨＰ、各部局等へのポスター掲示、学生への全員メール等による広報
締　　切：平成１９年　９月２５日（火）
結果発表：平成１９年１０月２６日（金）（「文字・活字文化の日」が土曜日のため）
表 彰 式：平成１９年１１月１４日（水）
審 査 員：『言語力』大賞コンテスト実行委員会委員
　賞　　：大　賞　各部門　１名（図書カード１０万円）
　　優秀賞　各部門若干名（図書カード　５万円）
　　佳　作　各部門若干名（図書カード　５千円）
受賞作品の公開：図書館ＨＰに審査評を加え掲載

*********平成２０年には第４回が行われる予定です。奮ってご応募ください！*********